

# 聖書に親しむ

2013年聖書週間(11月17日～24日)

テーマ:「あなたのみことばは、わたしの道の光 わたしの歩みを照らすともしび。」(詩編 119編 105節参照)

2013.11.17

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465

郵便振替 00160-1-880256 (宗)カトリック中央協議会データ口

## 巻頭言

### 神様のことば

#### カトリック大分教区司教 浜口末男

生涯の中で、よい先生に巡り会えるのは本当にお恵みだと思います。わたしは福岡のサン・スルピス大神学院に入学して、一人のよい先生に巡り会えました。Z・イエールというカナダ人司祭で、現、日本カトリック神学院聖書学の教授でした。

大神学校に進学すると、すぐ院長神父様に呼ばれ、霊的指導司祭(現在では「霊的同伴者」と呼ばれる)を誰にするかと問われました。わたしは、「入学してまだ二、三日しか経っていませんので、誰がどんな人かわかりません。ですから院長神父様が決めてください」と、お願いしました。すると院長神父様は、口元を少し緩めて、「やさしい人がいいですか、それとも厳しい人がいいですか」と、尋ねられました。今度はこちらが口元を緩めて、「やさしい人がいいです」と、答えました。こうして司祭叙階までの、8年間に及ぶイエール神父様との付き合いが始まりました。この方は、時間の観念のなさ以外は、全く尊敬に値する方で、すべてをゆだねることができました。

そのころ神父様は、『聖書思想事典』の翻訳に心血を注いでいました。もともと時間の観念のない方ですから、完璧を求めて、いつ終わるともしれない作業に没頭していました。その姿を見ていると、この方には何も文句を付けることができませんでした。指導を仰ぎに行くと、机の上に山のように積んでいる翻訳文を取り出し、新米神学生を相手に、多分素人にもわかる翻訳かどうかを確かめていました。もしかしたら聖書に親しませるという親心があったのかもしれませんが。

多分、授業でも出版前の翻訳文を使っていたと思



いますが、『聖書思想事典』の本文は神学であって、人間の考えに過ぎず、本当に大切なのは、引用で挙げられている聖書の本文です、と教えられていました。そのころのわたしには、『聖書思想事典』の本文の方に興味があり、その理解の深さに驚きもしましたが、聖書の引用箇所にはあまり興味は持てませんでした。それでも神父様は、事典は横に、聖書を中心に置き、引用箇所を開いて前後文を読み、ノートするように命ぜられました。一応命令に従いましたが、神父様の思惑には十分にこたえることはできませんでした。司祭になって、説教の準備をするときも、まず解説書から読み始めるという始末でした。

いつのころからか、やっと聖書本文を読むようになりました。多くの体験をし、多くの困難にぶつかって、聖書の中にその答えを見つけたからだろうと思います。多くは、事が終わってからですが、出来事の意味を聖書の中に見いだすことができました。聖書は物語風にできていますから、とても具体的にこたえてくれます。やっと、聖書が神の生きたみことばであり、神の知恵に満ちているということを信仰宣言することができるようになった気がします。そして、やっと恩師が指し示していた世界に気づいたような気がします。

## 今年のテーマ:「あなたのみことばは、わたしの道の光 わたしの歩みを照らすともしび。」

(詩編 119 編 105 節参照参照)

カトリック東京大司教区司祭 吉池好高

聖書を読むためには聖書を手元に持つ必要があります。都会の大きな書店に行けば、聖書はさまざまな宗教関係の書籍が置かれた棚の基督教のコーナーに置かれています。インターネットで検索して直接出版社に注文することもできます。聖書を取り扱っているのは、大抵基督教関係の出版社であることが分かると思います。そのようなことが面倒なら、近くの教会に行って、聖書を読みたいと申し出てはいかがでしょうか。聖書が手に入るように取り計らってもらえるはずですが、聖書という書物の一番の特色は、それが基督教の書物であるということです。そのようなことを念頭において聖書を読む必要があります。クリスチャンでなくても、聖書を読むことはできます。けれども、聖書を聖書として読むためには、虚心になって、それが基督教の信仰の書物であることを前提とする必要があります。そうでなければ、聖書を読んでも、なぜこの書物がこれほどまでにありがたがられてきたか分からないのではないかと思います。

聖書という広範な内容を持つ書物を「聖書」として伝えてきたのは、基督教の教会に受け継がれている神への信仰を生きてきた人々です。この書物の中に語られていることが、基督教の信仰の内容を形成しているのです。そのような意味で、聖書は聖書と呼ばれているのです。

聖書に何が書かれているかを知るためにはそれを読まなければなりません。読むということは、読み手であるわたしたちがそこに書かれていることを、わたしたちの考えに基づいて判断することだと考えられがちです。けれども、聖書がそれを読む人にとって、「聖書」となるためにはそれだけでは十分とは言えません。むしろ、聖書を「聖書」として読むためには、聖書の中に語られていることを「聴く」姿勢が必要となるのです。本来「読む」という行為はそのようなものであったはずですが、わたしたちは聖書と出会うことによって、「読む」ということは「聴く」ということであったことに気づかされるのです。

「神よ、あなたのみことばは、わたしの道の光、

わたしの歩みを照らすともしび」(詩編 119 編 105 節参照)。今年の聖書週間のテーマとして選ばれたこの詩編の一節は、このような聖書の特質を歌い上げています。信仰の集いの中で、このような信仰の歌を歌い続けてきた人々は、その集いの中で聴いた聖書のエピソードによって、彼らが信じる神と出会っているのです。そのエピソードの中に語られている神と彼らの祖先たちの物語、あるいは、イエス・キリストを信じた信仰の先輩たちのイエス・キリストとの出会いの物語を通して、信仰の集いに参加している人々は、神のみことばを聴くのです。そのようにして聴いた神のみことばが自分たちの人生の道を照らす光であり、ともしびであると、この歌はそれを歌う人々の神への信仰を告白しているのです。

聖書が「聖書」であるゆえんは、聖書がわたしたちによって解釈されるのではなく、聖書の中に響く神のみことばによって、わたしたちの歩む人生の意味が説き明かされることにあります。聖書の中に見出すことのできるみことばに照らされて、わたしたちが生きる人生の日々を顧みつつ生きるということがクリスチャンとして生きるということです。そのようにして、聖書に響くみことばは、わたしたちの人生の日々を照らしつつ、わたしたちをわたしたちの人生のかなたにまで導く、まことの光となるのです。



## 一聖書通読マラソン

カトリック長崎大司教区信徒 長野宏樹

「聖書通読マラソン」は、とにかく聖書を全部読み通すことを目指すもので、意味が分かってと分かるまいとただひたすら読み通すものです。このシリーズで紹介された「聖書百週間」が百週間かけて個人と共同体でじっくり読むのに対して、通読マラソンは個人でできるだけ早く読破しようとするもので、ある意味でマラソン競技にも似ています。

「聖書の分かち合い」はじっくりと味わうものであるのに対して、「聖書通読」は全体像をつかもうとするものです。あたかも車の両輪のように両方に参加することが大切です。

### 1. 通読マラソンのねらい

主日のミサで旧約と新約のみことばに3回ほど触れますが、聖書全体として何が書かれているかは意外と知りません。全部読んでみたいと思ってチャレンジしてみても、レビ記あたりで投げ出すのが落ちではないでしょうか。通読マラソンは粘り強く最後まで読み通すことを目標としています。それを通じて旧約と新約のつながり、聖書を通して父なる神がわたしたちに話しかける内容をよく理解できるようになります。

### 2. 読み通す方法

最初から最後まで聖書をそのまま読むこともできますが、聖書に書かれた出来事を時系列に並べ替えた通読表に従って読み進めていきます。読むスピードは各人の事情によりますが、とにかく読み続けます。読んだ所は通読表に読んだ日を記入していきます。

### 3. 通読表

いろいろな表が工夫され公表されています。インターネットで「聖書通読表」と検索すれば出て

きますので、それを使用するのがよいかと思えます。カトリックの場合は「旧約聖書続編付」の表を使いましょう。代表的なものは、①和善聖書通読マラソンの通読表 ②聖書百週間の配分表 ③日本聖書協会の「聖書通読表」などがあります。

### 4. どの程度のペースで何回くらい

8日間で読み終えたという方がおられますが、現実問題として1日3章くらいで1年間というのはいかがでしょうか。1年間で読むための通読表も公表されています。読んだ回数も、なんと365回といった猛者もおられるそうですが、まずは1回挑戦してみて、それから何度も挑戦してみましよう。

### 5. 通読のひけつ

①速読で一気に読む ②分かって分からなくても読む ③ちょっとした合間に読む ④家庭、グループ、教会などで親しい方々と一緒に読む ④祈りながら、神がわたしたちに何を示そうとしているかを考えながら読む、ことなどを心掛けたらいかがでしょうか。

「天におられる父は聖書の中で深い愛情をもって  
自分の子らと出会い、彼らとことばを交わすからである」  
(啓示憲章 21)

# 良書のすすめと読み方

## ①『聖書入門——四福音書を読む』

オリエンズ宗教研究所編

2013年 オリエンズ宗教研究所 1,800円+税

「マタイ福音書」冒頭から延々と続くカタカナの名前の羅列……福音書を初めて読もうと手にした途端、いきなり出鼻をくじかれたという話もよく聞きます。本書は日常での習慣や古典などから具体例を引き、イエス・キリストの呼びかけが現代に生きるわたしたちにどのようにかかわっているのかをやさしく解説する、まさに日本人に寄り添う聖書入門です。用語解説、さらに渡辺和子修道女（ナミュール・ノートルダム修道女会）をはじめとする聖書とのかかわりについてのコラムも収録されているので、基礎的な聖書知識の習得のほか、信仰を養うための聖書入門講座のテキストとしても最適です。



## ②『憩いの水のほとりに——詩編 23 の黙想』

高橋重幸著

2013年 オリエンズ宗教研究所 1,500円+税

聖書を祈りの心で深く味わう「聖なる読書（レクチオ・デイヴィナ）」が全教会的に勧められています。伝統的な聖書の読み方で、シンプルでありながらも大きな恵みをいただく体験を多くの人がしています。本書は実際に「聖なる読書」の方法で、多くの人に親しまれている詩編 23 を読み進めます。観想生活の中で聖書に長年親しんできたトラピスト（厳律シトー会）司祭である著者が、一節一節をていねいに解説。聖書の知識も盛り込まれており、一つのことばの背景にある豊かさを味わいつつ、読者も自身の経験と重ね合わせて黙想するように、おのずと導かれていきます。



## ③『主日の福音(A年・B年・C年)』雨宮 慧著

1989~1991年 オリエンズ宗教研究所

各1,800円+税

主日の聖書朗読配分は3年周期で、それぞれA年・B年・C年と呼ばれています。今年の12月1日からはA年となり、マタイ福音書が中心となって読まれます。本書は3冊のシリーズとして、各年の主日（季節・年間）、主要な祝祭日、聖なる三日間のすべての福音朗読箇所を解説。その日のキーポイントを簡潔に示し、旧約聖書や共観福音書同士の関連まで理解できます。図解入りの説明も豊富で、また朗読箇所から該当主日がわかる索引も好評。聖書を神のことばとして読むための手引きとして、刊行以来20年以上も支持され続けているロングセラーです。



## ④『聖書のシンボル 50』

M・クリスチャン著

2000年 オリエンズ宗教研究所 1,000円+税

イエス様がたとえとシンボルを用いて神の国を説明してくださったように、聖書は多くのシンボルを使って、神とこの世界の神秘について語りかけています。しかし、日本とは異なる文化から生まれてきたため、聖書で用いられているシンボルの中には、現代のわたしたちには分かりづらいものも多くあります。本書では動物や数字など、シンボルとして意味が込められている50の事物を取り上げ、それぞれやさしく解説しています。それらを理解することによって聖書の世界が一層広がり、より深く神のことばを味わうことができるに違いありません。



(オリエンズ宗教研究所)

◆編集後記◆今年是全国的に暑い夏でしたが、ようやくさわやかな秋が巡ってきました。美しい日本の四季に感謝しながら日々、わたしたちがいただいているたくさんの恵みの中で、もっとも大きなもの、それは「みことば」ではないでしょうか？その「みことば」の中でも特に美しい詩編からテーマを選びました。人生の歩みに一筋の光をもたらしてくれる「神のことば」に励まされながら日々歩んでいきたいものです。

ご執筆いただいた浜口末男司教様、吉池好高神父様、長野宏樹様、には分かりやすく解説していただきましてありがとうございます。良書をご紹介くださったオリエンズ宗教研究所様にも心より感謝を申し上げます。

◆献金のお願ひ◆この『聖書に親しむ』は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願い致します。

振込先： 郵便振替 00160-1-880256 (宗)カトリック中央協議会データ口